

## J・F・クーパーと

### アメリカン・デモクラシー…矛盾とその相克

大 畠 一 芳

一九二三年八月、D・H・ロレンスはニューヨークのトーマス・セルツァー社から評論『アメリカ古典文学の研究』(Studies in Classic

American Literature)を上梓した。この示唆に富む評論は十八世紀末か

ら十九世紀前半に活躍した九人のアメリカの代表的な著作家とその作品に焦点を絞り、ロレンス特有の筆鋒鋭い分析を加えている。こ

こで扱われているアメリカ人は、ベンジャミン・フランクリンに始まり、クレヴクール、フェニモア・クーパー、エドガー・アラン・ポー、ナサニエル・ホーソーン、リチャード・ヘンリー・ディナ、ハーマン・メルヴィルと続き、そして最後にホイットマンで終わっている。この評論の優れた点は、個々の作家についての単なる論評に留まらず、アメリカという国、そしてアメリカ人全体を見据えた文化論として読むことができるほど広い射程を備えていることである。それは全体を通してロレンスが繰り返す「アメリカ」と「アメリカ人」に言及していることから容易に窺うことができる。しかし難点がないわけではない。ロレンスの文章には比喩的、暗示的な表現が多用され、かつ論の展開に飛躍が多々見られ、論理的というよりはむしろ直観的、散文というよりむしろ詩的な韻文を思わせ

るために、作者の意図するところを読者が正確に把握するのには思うほど簡単な作業ではない。

『アメリカ古典文学の研究』は第一章「土地に宿る精神」(“The Spirit of Place”)で始まっている。まずアメリカとは、そしてアメリカ人とは一体何であるのかについて皮肉を交えて議論を展開する。ロレンスは次のように語る、「われわれがこの研究で果たすべき仕事はわかった。アメリカの物語をアメリカの芸術家から救い出すことだ」と。「アメリカの物語をアメリカの芸術家から救い出す」というロレンスのこの言葉には一体いかなる意味が込められているのであろうか。ニューイングランドを切り開いたピューリタンの自由の概念にひとくさり苦言を呈した後、とどのつまりアメリカの特徴は「デモクラシー」であるとして、第一章「土地に宿る精神」を次のように結んでいる。

アメリカ人の意識は、これまでは偽の夜明けだった。デモクラシーという消極的な理想だった。だがその下には、この公然たる理想に対立して、「そいつ」の最初の暗示と啓示が。「そい

つ、「つまりアメリカ人の丸ごとの魂なのだ。

アメリカ人の言説からデモクラティックで観念的な衣装をはぎ取り、その中にある「そいつ」の色浅黒い肉体を、できる限り見るようにしなければならない。(第一章)

アメリカという歴史上特異な発展をした国の最大の特徴が「デモクラシー」であること、そしてその理念がいかに虚偽に満ちたものであるかということもロレンスは明敏にも見抜いていた。ここで語られている「そいつ」(「It」)をロレンスは、「人間のもつとも深遠な丸ごとの自己、丸ごとのままの自己」であつて、生半可な観念論などではない」と規定している。ロレンスにとって、おそらくアメリカ人はデモクラシーという浅薄な観念(少なくともロレンスはそう考えていた)に絶大な忠誠を誓うあまり、人間の心の奥底に潜む「そいつ」(「It」)から目をそらしていると映つたに違いない。ここでロレンスの語る「そいつ」(「It」)という曖昧な表現は、「丸ごと自己、丸ごとのままの自己」と示されているだけで、それ以上の言及はない。具体的に何を意味するのかそれ以上の説明がなされていないためさまざまな議論を呼ぶ表現であるが、ロレンスが意図したものは、おそらく理念の背後奥深くに潜む「情念」という概念で説明できるものであるのかもしれない。結局ロレンスが『アメリカ古典文学研究』の中で意図したことは、デモクラシーというひとえにアメリカ的な衣装をアメリカ人から剥ぎ取り、「そいつ」を暴き出すことであつた。それが「アメリカの物語をアメリカの芸術家

から救い出す」という表現でロレンスが試みようとしていたことであつたと推測できるのである。

ロレンスは「そいつ」を評価の視座にすえて、アメリカ人作家を一刀両断に裁断してゆく。当然のことながら、二極分断的な裁断にならざるを得ないのであるが、デモクラシーという浅薄な理念に留まる作家は滅多切りされることになり、意識的であれ無意識的であれ観念的な衣装の背後に潜む「色浅黒い肉体」の存在を感じていられると思われ作家はそれなりの評価を受けることになる。したがつて「すべてのアメリカ人の父」として後世に語り継がれることになるベンジャミン・フランクリンに対するロレンスの評価がはなはだしく低いのも頷けるのである。フランクリンに対してロレンスは次のようにこき下ろす。

おまえの暗闇に潜む自己を、いつたいイェール大学が教育してくれるのか。それともハーヴァード大学か。

理想的な自己だと。ところがあいにくだが、理想的な窓の下で、狼がコヨーテさながら、締め出されて吠えたてる異様な逃げ腰の自己が私にはあるのだ。闇に輝く彼の赤い目が見えるかい。これこそ成熟を遂げようとしている自己なのだ。

人間の完成の可能性などと、よくもぬげぬげ言えたものだ。誰であれ、生きている限りは、自己の内部に矛盾しあうおびただしい人間が宿つているというのに。これらの自己のうちどれを、他の自己をことごとく犠牲にして、完成させようと

いうのだ。(第二章)

後世に及ぼした影響力という点において、十八世紀アメリカの最大の巨人といつても言い過ぎではないと思われるベンジャミン・フランクリンの本質を見事に喝破した、鋭い指摘である。「完全な市民」という香しい高貴な理想を掲げたフランクリンではあるが、ロレンスには香しいどころか、しわを隠すためにおしろいをこつてり塗りたくったなんともグロテスクな老女の悪臭と映ったに違いない。

ロレンスのクレヴクールに対する評価はフランクリンほど低くはない。というのもクレヴクールはフランクリンとは違い、「色浅黒い肉体」を意識していたとロレンスは感じたからである。ただクレヴクールの問題は、「色浅黒い肉体」を意識しつつも、決してそこに身を置くことはなかったという点である。「そいつ」の存在を知り、意識しつつも、彼は積極的にそこまで降りて行くことはなかった。存在の根源までみずから身を落とし、観念のみの希薄な生活の殻を打ち破ろうとすることはなかった。対岸の火事を観察するがごとく、みずからを安全な場所に置き、「そいつ」を観察していたのである。ロレンスのクレヴクールに対する苛立たしきの原因が、この踏ん切りの悪さであったことは想像に難くない。日本的に言えば、清水の舞台から飛び降りるほどの覚悟なくして、「そいつ」を実感できようか。したがって、クレヴクールの代表作『アメリカ人農夫の手紙』(Letters from an American Farmer)は、みずからを安全な場

所におき、完全な防御服を身にまとい、火傷することなく対岸の火事を消そうとする消防夫のような、いわば傍観者の憧れと空想の産物に過ぎないことになるであろう。

何しろ同時に彼は、「自然」が美しく純粋で、人間がすべて兄弟同士で平等で、お互いに甘ったれ合う鳩さながら愛し合うものだと、頭から決め込んでいたからだ。彼は自分の処方箋どおりには人生を生きようと決心していた。だから「自然」とあまり親密に触れ合いすぎると、いつも賢く身を引いて、交易や物質世界に逃げ込んだ。にもかかわらず、彼は自分の心を満足させるために、野蛮な暮らし方というものを知らうとした。そこであの『アメリカ人農夫の手紙』をでつち上げたという次第なのだ。いわば願望充足だ。(中略)

本当は彼は、理知以前の暗い生命が嫌いなのだ。本当の官能的な神秘が嫌いなのだ。だが「知る」ことは願っている。全く飽く事のないアメリカ風の好奇心だ。

彼は嘘つきだ。(第三章)

「嘘つきだ」と決めつけられたクレヴクールにおそらく反論の余地はない。そしてこのようなアメリカ人をロレンスは「白い野蛮人」と呼ぶのである。

さて前置きが長くなったが、ここまでの論考の主たる目的はロレンスの批評の視座をあらかじめ確認しておくことであり、ロレンス

論を展開することではない。すでに論じてきたように、ロレンスのよって立つ視座は、デモクラシーに象徴されるアメリカの理念などではなく、その理念を突き破った地平に見えてくる赤裸々の情念であったことが判る。そしてこの視座を一方に据え、そこからJ・F・クーパーを眺めるロレンスの論評は、興味深いクーパー論を提供してくれるのである。ここからの論考は、ロレンスが提供してくれるクーパー論を基軸にして、その妥当性を確認した上で、クーパーの作品の謎とクーパー自身の矛盾を説明することにある。

『アメリカ古典文学研究』においてそれぞれ二章づつ割り振られている作家が二人いる。それはJ・F・クーパーとハーマン・メルヴィルである。この論考ではクーパーを論じた第四章と第五章に焦点を絞り、ロレンスの示唆に富む重要な指摘を整理しておきたい。ロレンスはクーパーの作品を大きく二つに分類している。一つはアメリカの白人社会を中心とした『帰郷』(Homeward Bound)、『故郷』(Home as Found)、『密偵』(The Spy)、『水先案内人』(The Pilot)であり、もう一つはアメリカ西部を舞台にした、いわゆる「レザーストッキングもの」と呼ばれている五部作である。第四章「フェニモア・クーパーの白人小説」では主に『故郷』が中心に扱われ、第五章「フェニモア・クーパーのレザーストッキング小説」においてはナッティ・バンポ(Natty Bumppo)を主人公とするアメリカの原野を舞台とした一連の冒険譚が中心となっている。第四章の白人小説はさておき、重要なのは第五章の一連のレザーストッキング小説である。というのも第二章においてベンジヤミン・フランクリン

を、第三章においてクレヴクルを、そして第四章においてクーパーの白人小説を手厳しく批評してきたロレンスが、ここにきて初めてアメリカ小説の価値に対して、むろん全面的にはないが、幾分肯定的な批評を展開しているからである。ロレンスはこう告白する。「私はレザーストッキングものが、かねてからこよなく好きだ」と。さらにレザーストッキング五部作の最後の作品『鹿殺し』(The Deerstalker)に至っては、もう手放しの賛辞としか言いようがないほどの惚れ込みようである。

「レザーストッキング」ものの中で最も魅力的なのは、最後の本、『鹿殺し』だ。この時のナッティは「鹿殺し」と呼ばれる元気はつらつたる青年だ。しかし決して若い盛りとは言えないにしても、それでもいろいろなことをやるだけの元気は残っているような、無口で几帳面な青年だ。

珠玉のような作品だ。一片の完璧な模造宝石と言っても良い。そしてこの私自身、見せかけだけの真実に欺かれぬ限りは、完璧な一片の模造宝石が完璧な台にはめこまれているのが好きだ。そして『鹿殺し』のはめこみ台は、おそらく最高の出来栄だ。(第五章)

さらに「これは神話であって、写実を意図した物語ではない。美しい神話として読むことだ」と記していることからして、ロレンスがこの作品を高く評価するその理由は、クーパーが観念的なデモク

ラシーの殻を突き破り、あるべきアメリカ人の姿を神話化した点にあることは間違いない。確かにクーパーの作品は晩年の作品になるにしたがつて現実味が次第に弱まり、象徴性が増してくるのは事実である。この神話化の過程に関してロレンスはきわめて象徴的かつ暗示的な指摘をしている。

ナッティとチンガチグックとは、たがいに平等でも不平等でもない。彼らはそれぞれ、時が至ればたがいに従い合う。そしておたがいに相手のいる場所では厳しく沈黙し合い、幻想を作り出したりせず、厳しく自分自身の分を守り合う。それぞれがまさに人間を支える粗野な柱であり、自分の人間性を支える粗野な生ける柱だ。そして人間性を支えるこの粗野な柱の神性を承知し合っている。新しい関係だ。

「レザーストック」小説は、この新しい関係の神話を作り出す。そして老年期から黄金の青年期へとさかのぼってゆく。それはアメリカに関する本当の神話だ。まずアメリカは老いたうえにも老いた年齢で出発し、皺だらけの姿で古い皮膚に包まれ身もだえしている。それから徐々に古い皮膚が脱ぎ捨てられて、新しい青年期をめざす。これはアメリカの神話だ。

ロレンスはレザーストックの五部作の主人公(ナッティ)が作品を重ねるにつれて、徐々に若くなっていることに着目し、その点にアメリカがヨーロッパ(古い皮膚)から逃れて、新世界において

再生してゆく過程を重ね合わせ、象徴的な意味を読み込もうとしている。

なるほどそれはそれで一つの解釈であり、慧眼である。ロレンスの解釈は重要な指摘ではあるが、しかし、作品の成立年代と当時のクーパー自身を取り巻くさまざまな状況を仔細に検討すると、クーパーがロレンスの指摘したような象徴的な意味を意図したか否かはさておき、そのように書かざるを得なかったというのつぴきならぬ事情が作品成立の背景に存在していたと推測できるのである。その事情とはアメリカとデモクラシーに対するクーパー自身の意識の変化である。クーパーの意識の変化を辿る時、二つの著作が恰好の材料を提供してくれる。それは『アメリカ人観』と『アメリカの民主主義者』である。これら二つの作品の中で表明されたクーパーの見解を辿るとアメリカに対するクーパーの意識がどう変化したのか明確に知ることができるのである。

クーパーは一八二八年に『アメリカ人観』(Notions of the Americans)を著した。この著作は書簡体で書かれており、あるイギリス人がアメリカの実情を実際の見聞に基づいて本国の友人に伝えるという旅行記の体裁をとっている。旅行者であるイギリス人語り手によれば、「最近のアメリカに関するイギリスの書物のほとんどが、ある種の、歪んだものの見方や描き方をして」おり、「戯画への嗜好が顕著に認められた」ために、アメリカの現実をヨーロッパに正確に伝える必要性に駆られて書いたと語らせている。もちろんこのイギリス人の語り手は著者クーパーの分身であると考えて差しつかえな

いでであろう。この著作の特徴は、アメリカ社会のさまざまな面の特徴を好ましいもの、歓迎すべきものとして、イギリスに紹介している点であろう。例えば、ニューイングランドの村落に関して、イギリスと比較して劣るところか、今まで見たこともないほど素晴らしいとその優れた点を列挙する。

空間的なゆとり、活発さ、整然としたたずまい、安楽な暮らしぶりなどの点で、僕が今までに見たどの村落をも（まったくのところがこの国のかつての母国イギリスの村落でさえも）はるかに凌駕しているのです。（中略） これまでにヨーロッパを幾度も巡り歩いたばかりですが、これらに匹敵するような村落に出会ったことはありません。

またその土地に住む住民たちは、イギリス人とはまったく異なる態度を示すとして、いくつか具体例を列挙している。例えば宿屋の主人を例に取り、イギリスの宿屋の主人との相違点を次のように語る。

イギリスの宿屋の主人とニューイングランドの宿屋の主人とは、同業者ながら極端な違いがあります。つまり金持ちにこびへつらいの態度を示す者と、金持ちにも心を動かされず、しばしば。一見冷淡とも思えるほどの態度を示す者との違いです。どうやら前者は客の品定めをして、その客が落としていきそう

な金高をひと目で算定しているようであり、一方、後者はどのような仕方でも客をもてなしたら、その客の慰安にもつとも資することができ、かつ、みずからの立場をも著しく損なわずにすむかということに鋭意考えているように思われるのです。

さらに続けて「アメリカの重要な州の統治機関で責任ある重要な地位についている人」、いわゆる政府高官が経営する宿に宿泊した体験について触れ、このアメリカ人の経営者がみずからの手で客の荷物を気持ちよく運んでくれたことを紹介している。なぜ彼がそのようにしたのか、それはこの主人が「自分の宿の泊まった客の財産を保護することが自分の責任を果たすべき義務である」と考えていたからである。翻ってイギリスの場合を考えると、イギリス人の宿屋の主人なら、客の荷物をみずから運んだなら「主人としての威厳にかかわると考え、まず番頭のジョンを呼びつけるはずだ」、するとその番頭は、「おそらく馬蹄のトムか下足番のディック」なりに命じて荷物を運ばせることになるであろう。このような具体的な事例を紹介した後で、イギリス対して痛烈な批判を投げかける。「もしあなたが盲従的なへつらいや金銭的な報酬目当ての至れりつくせりのサービスを受けるのを好むなら」、イギリスを旅行したほうが良い。しかし、「客の人格に敬意を払うばかりでなく、宿の主人自身的人格をも尊重しつつ、つねに変わらない礼儀と好意ある心づかい」を望むなら、そのときにはアメリカを旅行することを薦める、と力説する。

このような具体的な事例から、語り手はさらに続けてアメリカ人一般の国民的な気質にまで言及し、次のようにアメリカ礼賛を展開している。

他人の気持ちをつねにまじめに顧慮するという傾向は、アメリカ人の著しい国民性の一つに数えられましょう。それはいわば、高度の文明が産み出すもつとも好ましい、かつまた、もつとも確実な成果にほかなりません。むろん、ここで私が言う文明とは大理石に磨きをかけたり、大広間を金色に輝きわたらせたりするものではなく、理性や条理の普及を促すとともに、社会の人道的な資質を向上させずには置かないような、しかも場合によっては、人々を洗練教化して優雅な存在たらしめるようなものことです。アメリカ人は人口の割には人間らしき、理知、心身の慰安など、好ましい要素が多く、この点にかけては諸国を凌駕しています。したがってこのような観点から考えれば、アメリカは疑いもなく世界でもつとも文明化された国家だと言えますでしょう。

クーパーがアメリカという新興国家をこよなく愛し、旧大陸の文明諸国家に対抗すべく、自画自賛に思えるほど高く評価している様が痛いほど理解できるのである。特に国民の一般的な資質として、アメリカ人の他者への配慮や道徳性といった人間的な側面にクーパーが限らない信頼を置いていることが窺えるのである。しかもそ

れらは十八世紀に誕生したばかりのアメリカという特異な新興国家が産み出した気質なのである。クーパーがこの新興国家アメリカに寄せる期待はまさしく熱烈な愛国者のそれであつたと言えよう。アメリカ紹介を目的として一八二八年に書かれた『アメリカ人観』はアメリカの好ましいと思われる特徴を中心に構成されているためでもあるだろうが、基本的にアメリカ礼賛の書物であることは確かである。

特に「修道院長ジロマッチへの書簡」の中で言及しているアメリカの法律に関する記述は、クーパーのその後の運命に暗い影を投げかけるものとして、暗示的である。クーパーはやがて自分自身に降りかかることになる皮肉な運命など当然のことながらこの時点においてむろん知るすべもない。この書簡の中にアメリカの新聞の役割についての件があるが、アメリカにおいては新聞の編集者であろうと誰であろうと、大統領を相手取って告発することが可能であることを指摘している。

大統領を相手取ってその犯罪性を衝くような告発を行おうとも、もし告発の正しさを証明できるならば、その人は誰にもとがめられずに告発行為を完遂することができるのです。要するにその人は世論という目に見えない楯によつて守られているのです。そして世論は単に法と相呼応しているばかりでなく、この国においては法自体をつくるものでもあるのです。(傍線筆者)

一八二八年の時点でクーパーがアメリカの好ましい特徴として列挙した事実に対して彼自身がどれほど深い認識と洞察を持っていたのか知りようもない。しかし、『アメリカ人観』が旧世界の国々向けにアメリカの特質を単に美化することのために書かれたのであったとするなら、クーパーやがてはそのような安易なしかも楽観的な認識を根底から崩されることになるのである。この著作の十年後、クーパーはこの国において法自体をつくる世論を敵に回すことになり、手痛いしつぺ返しを食らうことになる。クーパーの悲劇と一連のレザーストックキング小説を書かざるを得なかつた理由は、実はここにその萌芽を見ることができるのである。

クーパーは十年後の一八三八年に『アメリカの民主主義者』(The American Democrat)を世に問うている。そしてこの本を出版した背景にはやむにやまれぬ、差し迫つた事情があつたというのが定説となつている。その事情というのは、ニューヨーク州クーパーズタウンの由緒ある旧家、クーパー家が所有する土地に絡む問題であつた。クーパーズタウンという名称からすぐ分かるように、この村はクーパーの父ウィリアム・クーパーが獲得して開拓した広大な土地であつた。大地主として君臨した父ウィリアムが政敵の凶刃に倒れ、その資産を譲り受けたフェニモアは、一八二六年から七年間ヨーロッパで過ごしてから、一八三三年に故郷に戻つたのである。言うならば所有地の管理をおろそかにしていた不在地主が帰国したのであつて、この期間に起きた二つの出来事がクーパーに『アメリ

カの民主主義者』を書かせた直接的、あるいは間接的な原因となつたと考えられる。

まず間接的な原因であるが、それは政治的な変化であり、男子普通選挙法の拡大に伴い一般大衆が政治の表舞台に登場してきたことである。クーパーがアメリカを離れていた七年の間にアメリカの政治的環境は劇的に変化していた。十九世紀初頭、各州において選挙資格から財産条項が削除され、普通選挙が実施されつつあつた。独立当初の十三州のなかでメリーランド州とニュージャージー州の二つの州は早くから普通選挙法を実施していた。独立時の十三州のなかでもっとも保守的であつたといわれるニューヨーク州でさえも、一八二一年に州憲法を改正して選挙資格の条件であつた財産条項を撤廃し、男子普通選挙法に基づいて選挙を行つている。依然として納税規定は残つていたが、それも一八二六年には廃止されている。とりわけ新しく連邦に編入された中西部の州においてこの傾向は著しく、一八〇三年に州に昇格したオハイオ州においてはまだ納税規定は残つていたが、インディアナ州(一八一六年連邦編入)イリノイ州(一八一八年連邦編入)においては連邦に編入当初から白人成人男子にはまつたく何の選挙資格制限もなかつた。つまりアメリカの普通選挙法はアメリカ中西部からその波が東部を襲つたと考えることができるのである。というのも西部の無尽蔵とも思える広大な土地の存在が土地の取得を容易にした結果、財産条項などまつたく無意味なものにしてしまつたからであろう。一八二八年の大統領選挙を勝ちぬぎ、第七代大統領に就任したアンドルー・ジャクソンはアパ



ラチア山脈以西から登場した最初の大統領であるが、いわゆるジャクソニアン・デモクラシー誕生の背景には選挙法の拡大があつたのである。初代のワシントンから第六代ジョン・Q・アダムズまで、六人の大統領のいずれもがマサチューセッツ州カヴァージニア州の出身であつた事実を考えると、テネシー州出身のジャクソンのアメリカ政治史上への登場が十九世紀の前半を象徴する、いかに衝撃的な出来事であつたか容易に想像できるのである。

このような選挙権の拡大という政治的な変化が、憲法制定会議から五十年足らずのうちに建国の父祖たちが恐れていた事態を現実引き起こすことになつた。二つ目の原因、しかも直接的な原因となつた出来事は、クーパー家の土地をめぐる争議である。この争議はクーパー家の所有地スリー・マイル・ポイントがオツエゴ湖という風光明媚な湖の湖畔にあつたため一般民衆の格好のピクニックの場所となり、所有者であるクーパーが知らないうちに村の共有財産とみなされていくことに端を発する。所有者の知らない間に村の共有財産になつていくということ、そのことに異議を申し立てること自体が貴族的で非民主的であるとする民衆の反論に対して、そして民主的という名を借りた大衆のきわめて利己的な心性に対してクーパーは憤りを抑えることができなかつた。ことの重大性に気づいたクーパーは早速この地への立ち入り禁止告知を地方紙に掲載したが、そのことが逆に近隣の地方新聞の非難攻撃をひきおこし、さらに事態をいっそう紛糾させる結果となつたのである。

クーパーに『アメリカの民主主義者』を書かせることになつたこ

れら二つの理由は、アメリカの民主主義を考える上で、大変象徴的な意味を持つている。というのも、当時アメリカ社会に浸透しつつあつた大きな潮流、すなわち一般大衆の政治参加という民主化の潮流が、本来の流れから逸脱して濁流と化す兆候をそこに読み取ることができるところである。クーパーがこの濁流を本来の流れに戻す必要があると考えたのも無理からぬことである。端的に言うなら、本来なら許されるはずのない出来事が民主主義という名のもとにまかり通つてしまうような事態が頻発しつつあつたということでもある。ジャクソニアン・デモクラシーとして一般大衆に祭り上げられたこの時代は、裏返せば東部の富裕な商人や地主階級にとつてはジャクソン革命と呼ぶことさえ可能な急激な変化の時代であり、彼らに多大の衝撃と損害を与えた混乱の時代でもあつた。元来、クーパーは「国民の人格が押しなべて向上し、崇高な次元まで達しうる者の数は少ないかもしれないが、反面低劣な次元へと落ち込む者もまた少ない・・・むしろ低劣な次元まで落ち込んだ人々を人間本来の価値にふさわしい状態にまで引き上げるのが、その真の傾向だといえよう」（「民主主義国の利点」と記しているように、アメリカの民主的な政治形態をヨーロッパ諸国のそれと比較して非常に高く評価していた。またクーパーがアメリカを高く評価していたことは、前述したように『アメリカ人観』の中で顕著に示されている。ことから疑う余地はない。しかし一八三七年のスリー・マイル・ポイントをめぐる争議以後、アメリカは何かが変わつてしまった、変わったというより狂つてしまったといったほうがクーパーの心情

を代弁することになるかもしれないが、そのことを現実に認めざるを得なかつた点にクーパーの悲劇があつたと言ふこともできよう。

愛する祖国アメリカにおいて何かが変わってしまったという不安感、あるいは何か貴重なものが失われてしまったという喪失感、社会変動の激しい十九世紀において多くの作家たちが共通に抱いていた感覚であつた。二十年以上ヨーロッパに住み、祖国アメリカを再訪したヘンリー・ジェイムズが祖国に見出したものは、拝金主義に汚染された物質文明のはびこる混乱の極みであつた。アメリカを離れることなく一般大衆の素朴な生命力を『草の葉』(Leaves of Grass)に読み込んだ、あの民主主義の唱道者ホイットマンでさえ十九世紀の混沌たる状態を目の当たりにして『民主主義の展望』(Democratic Vistas)を書かねばならなかつた。時代の転換期に生ずるこのような喪失感、チェーホフの『桜の園』に登場するラネースカヤが認識できないもの、しかし彼女の娘たちが漠然と察知している感覚と同じものであつたかもしれない。時代の変化に取り残された地主階級のラネースカヤは、現実の変化を認識できない。いや、あえて分かつたかとうとしない。時代の変化を敏感に察した娘の一人、アーニヤの語る言葉はきわめて象徴的である。「どうしてわたしは、もう前ほど桜の園が好きでなくなつたのかしら。あんなにうつつりするほど好きだつたのに。この世でうちの庭ほどいいところはないと思つていたのに」と。桜の園が旧地主階級の過去の栄華の象徴であり、それを切り売りすることが旧体制の崩壊を意味していることは明らかであろう。クーパーにとつてのスリー・マイル・ポイ

ントはラネースカヤの『桜の園』であり、「エデンの園」そのものであつたのだ。現実に出し抜かれてしまつたという感覚、あるいは知らぬ間に時代が理想を追い越してしまつたという感覚は、おそらく『風とともに去りぬ』のヒロイン、スカレットもまた共有していた感覚であつたかもしれない。阿部公房の小説『榎本武揚』のなかで、ある日本兵の憲兵は問いかける。「私には何としてもはかりかねるのです。一つの時代の制度に忠誠であつたことが、何ゆえに咎められなければならないのでしょうか」と。クーパーの認識が、日本軍のこの憲兵の認識とまったく同じものであつたと断定するつもりはない。しかし独立戦争や南北戦争のような戦時の混乱状態ならいざ知らず、平時において所有地の一部が持ち主のあずかり知らないところで共有地へと姿を変えてしまう事態を体験したクーパーは、おそらく民主主義という制度の恐ろしさを身をもって感じたに違いない。播るぎない信頼を置いていた制度であるだけに期待を裏切られたというクーパーの絶望感、喪失感は想像に余りある。その落差は推し量るすべもない。

ではクーパーの想い描く民主主義とはどのようなものであつたのか。『アメリカの民主主義』の冒頭、クーパーはこの著作を世に問う理由を次のように記している。

筆者がこのささやかな書籍を著すにいたつた動機は、社会の幸福を図る上でもっとも重要な原理ともいうべきものが、最近一般民衆の間でしだいに曲解されてゆくのを幾度となく目にと

めているがためである。・・・確かに現状では集団としての人間を増長させ、過ちを犯させる一方、個々の人間を圧迫する傾向が目立つ。

一般民衆の誤った民主主義感を是正すべく筆を執ったことが示されているが、クーパーの論述は明快で分かりやすい。しかもよく整理された、バランスの取れた民主主義論となっている。まず政体について一般論を展開し、次に共和政体、そしてアメリカの共和政体へと、つまり総論から各論へと説き明かしてゆく。このような論述の仕方は、すべての項目に共通するやり方で、君主国、貴族主義国、民主主義国のそれぞれの利点と弱点を分析する際にもクーパーの論理的で几帳面な資質が遺憾なく発揮されている。とりわけ自由と平等に関するクーパーの見解には大変興味深いものがある。平等を二つの範疇に分類し、一つは権利の平等、もう一つは身分の平等であるとす。人間が、特にアメリカにおいて、平等なのは権利の平等であつて、社会的な身分の平等はまずありえないと主張する。このようにクーパーが主張する背景には、権利の平等のみならず、社会的身分の平等までも要求しようとする傾向の強いアメリカの社会風潮に対してあらかじめ警鐘を鳴らしているのだと解釈することもできよう。完璧な自由と平等を求めるアメリカの大衆に対するクーパーの見解は、自由に対する次の一説に明確に示されている。

完璧な、無制約の自由が社会の存在と相容れないものである

J・F・クーパーのアメリカン・デモクラシー…矛盾とその相克

ことは、身分の平等の場合と変わりはない。元々そのような自由は自然状態のもとでも存在しえない。なぜなら法の保護がなければ強者は弱者をしいたげ、隷属させようとするからである。したがつて、自由とは単に、ある社会契約の状態、つまり社会の人々が、かれらにとつて真に必要な、また明らかに重要な制約以外のものを持つてみずから束縛せしめないような社会契約の状態を意味するものと理解すべきである。

クーパーが恐れていたものが、民主主義国家において「多数派が強者になる」という危険性であつたことは明らかであろう。したがつて君主制国家、貴族制国家、民主制国家の長所と短所についてできるだけ私情を排して、公平に、かつ客観的に語ろうとしている彼の意図が伝わってくるにもかかわらず、こと民主主義国家の短所に触れだすと、クーパーの筆法は堰を切つたごとくにわかに勢いを増すのである。「多数が支配すべきなり」という民主主義制度の決まり文句に対して、多数派が必ずしも正義を行うとは限らないと反論する。なぜなら「国事に関しては、教養ある、富裕な階級の方が一般大衆よりも適切な判断を下しうる」からである。したがつて多数派が支配するのは法律に規定されている事項にのみ限定されるべきであるとしている。さらに「民主制国家においては、凡庸さに対して他の社会では与えられないような、高い価値や評価が与えられているのである」と語るにいたつて、クーパーの論評は、民主主義の短所を列挙するよりというよりもむしろ一般大衆への侮蔑へと転

じているようにも思えるのである。

一八三二年、ジャクソン政権下のアメリカを訪れたフランスのトクヴィルは、アメリカ社会に拡大しつつある平準化、すなわち民主化の状況をつぶさに観察し、「アメリカ社会では多数が思想に厳しい枠をはめている。その範囲内では、文章に携わるものは自由であるが、あえてそれから外れようとすると災難である。火あぶりの刑の恐れはないが、あらゆる種類の不快と日々の迫害の的となる」と記した。トクヴィルのこの指摘はクーパーのスリー・マイル・ポインント事件を早くから事前に予測していたかのようにも思えるほど、クーパーのおかれた状況を見事に説明することになる。事実、晩年クーパーはあらゆる種類の不快と大衆の冷淡なまなざしとの戦いに日々を費やさねばならなくなったのである。押し寄せてくる民主化のうねりに対抗し、クーパーはその違法性を告発し、十八世紀の建国の父祖たちの合衆国憲法の理念に立ち返ることを繰り返し主張した。この意味においてクーパーが貴族的な体質を持った時代錯誤者であると当時の一般大衆に非難されたとしてもやむをえない。クーパーの悲劇は、彼が絶対的な信頼を置いた民主主義の理念が現実の民主化する社会に追い越されてしまった点にある。時代がクーパーを頑迷な保守主義者に仕立て上げたとも言えよう。「人間をその生まれながらの体質や性癖から解放して、はるか高みに据えようなどというもくろみに対して信頼をおくことはできない」と記しているように、クーパーは、人間性に関しては建国の父祖たち同様に最後まで現実主義者であった。しかしいざ民主主義ということになる

と、自己の信奉する理念にかたくなに、しかも過大に信頼を寄せる理想主義者でもあった。社会の変化に応じて、民主主義という理念そのものもまた自在に変化するということは、おそらくクーパーにとつて許しがたいことであつたに違いない。憲法の精神への信頼は微塵も動くことはなかった。人間理解において現実主義者でありながら、民主主義という理念において理想主義者でもあるという内部矛盾が、クーパーをして激しく揺れ動く人生を歩ませたのである。

クーパーは作家生活の後半、レザーストキング小説に着手する。これら五部作は、一九二三年の『開拓者』(The Pioneer)、一八二六年の『モヒカン族の最後』(The Last of the Mohicans)、一八二七年の『大草原』(The Prairie)、一八四〇年の『案内人』(The Pathfinder)、そして最後を飾る『鹿殺し』(The Deerslayer)である。これら一連の小説の主人公たちは、ロレンスが『アメリカ古典小説研究』において指摘したように、後期の作品になればなるだけ徐々に若返つていくのである。出版年代と主人公の年齢を仔細に検討してみると、実は必ずしもロレンスが指摘したように出版年代順に若返つていくとは言えないのであるが、それでも最初のレザーストキング小説である『開拓者』の主人公は七十歳代前半であり、最後の作品『鹿殺し』の主人公は二十歳代前半に設定されており、そこにはおおよそ五十歳の開きがある。ロレンスの指摘はおおむね正しいことを前提とした上で、では、このように設定したクーパーの意図は一体何処にあつたのであろうか。

すでに論じてきたように、クーパーの理念と時代の潮流は乖離しつつあり、しかも時代との落差は拡大するばかりで、その隙間を補填することは不可能であった。選ばれた者が政治を主導する名望家政治から庶民の政治参加の時代へと大きくうねって変貌する時代の過渡期にあつて、クーパーはあえて流れに抗して、アメリカ建国の理念、そして民主主義の理想を頑迷固陋に説き続けたのである。

クーパーの説く民主主義の理想は、当時現実に着実に進行しつつあつた社会の平準化、すなわち急激な民主化とは相容れない類のものであつた。したがつて十九世紀のアメリカの現実とクーパーが理想とする民主主義の理想が乖離すればするほど、クーパーは小説の世界においてあるべきアメリカの理想的な姿を描き続けねばならなかつたのである。主人公のナッティ・バンポが一八二三年に『開拓者』において初めて登場した時、舞台は一七九三年に設定されていた。物語の舞台設定と現実の世界の時間差はわずか三十年に過ぎない。つまりそこで描かれた虚構の世界は当時の現実世界をまだ反映するものであつたのである。しかし一八四一年に出版された最後の作品『鹿殺し』においてナッティが登場する舞台は一七四〇年の開拓地である。物語の時間設定と作品の書かれた現実世界との時間的な開きは百年に拡大している。つまりクーパーのレザーストッキング小説の主人公の若返りは、クーパー自身のアメリカ社会に対する絶望感、喪失感と反比例していると言ふことができよう。クーパーの理想とする社会が現実世界において崩されつつあつたがゆゑに、彼はアメリカの理想を物語のなかで繰り返し書き続けなければ

ならなかつた。しかもクーパーはそれを未来のアメリカにはなく、消え去つた過去のアメリカ西部に求めようとしたのである。クーパーの後期の作品は「現実味がしだいに弱まり、美しさが次第に強まる」ことをロレンスは指摘している。その意味するところは明らかであろう。クーパーは同時代の「民衆主義」の有様をつぶさに観察し、絶望したあげく、「在るべき民主主義」「在るべきアメリカの理想」を虚構の世界において実現しようとしたのである。つまり現実世界において進行している「民衆主義」を超越した「かくあるべき理想の世界」を夢見たとも言ふことができる。現実味が薄まり、美しさが強調されていると感じるのは必然的な結果であつた。歴史が伝説となりそして伝説が神話となるためには、現実の不純物を一切排して、その理想を純化し、普遍化した時点において可能となる。クーパーはレザーストッキング五部作の最後の作品『鹿殺し』においてアメリカ民主主義の神話化に成功したのであつた。しかし同時にその世界はアメリカ民主主義の現実を否定し、現実世界から遊離することによつてしか理想を語れないというクーパー自身の悲劇の終着点でもあつた。現実に進行しているアメリカの民主主義とクーパーの描く理想の民主主義との相克は、小説という虚構の世界においてしか調和点を見出すことができないほど乖離してしまつていたのである。

引用文献

- Cooper, James. *Fenimore, The American Democrat*, New York: Vintage Books, 1969.
- Lawrence, D.H., *Studies in Classic American Literature*, New York: Penguin Book Ltd.1977.
- 五十嵐武士、福井憲彦、『アメリカとフランスの革命』（中央公論社、1998年）
- 大下、有賀編、『資料が語るアメリカ』（有斐閣、1989年）
- 紀平英作、亀井俊介、『アメリカ合衆国の膨張』（中央公論社、1998年）
- 渡邊俊夫他訳、『世界の名著 33 フランクリン、ジェファソン、マディソン、トクヴィル他』（中央公論社、1970年）
- ウオード、J・W、『アンドルー・ジャクソン』（研究社、1975年）
- モーガン、E・S、『合衆国の誕生』（南雲堂、1984年）
- オルテガ・イ・ガセット、『大衆の反逆』（ちくま学芸文庫、1998年）
- ハーツ、ルイス、『アメリカ自由主義の伝統』（講談社学術文庫、1994年）
- ルイース、R・W・B、『アメリカのアダム』（研究社、1973年）